

「鬼糞祭り-前編」

—二稿—

2025/3/31

脚本 太郎

〈人物表〉

姫島 晴彦	(15)	中学三年生
淀川 文夏	(15)	中学三年生
高城 充	(53)	村長
綾部 隆	(35)	教師
姫島 梨華	(40)	晴彦の母
姫島 茂	(40)	晴彦の父

1. 山道（昼）

一台のバンが走っている。

2. 車内（昼）

運転席と助手席にそれぞれ、黒服の男たちが座っている。

後部座席はなく、車の後ろ側は丸々カーゴスペースになっている。そこには姫島晴彦（15）、姫島茂（40）、姫島梨華（40）の三人が手足を拘束され、口にテープを貼られた状態で転がされている。各々焦燥の表情をしており、モゾモゾしている。

3. 高城邸・庭（昼）

立派な日本家屋。

高城充（53）と、側に控えるジャージ姿の男たちが立っている。男たちの手には塩の載った皿。

晴彦たちを乗せた車が入ってくる。

高城とジャージの男たちが車に近付く。

車が停車。

二人の男たちが降りてきて後部ドアを開ける。

晴彦、茂、梨華の三人を車から引きずりおろす。

三人の口元のテープを外す。

黒服の男たちがジャージ姿の男たちの後ろに下がる。

高城 「久しぶりだな。村民管理番号二四三七と二四六九。我々

から逃げられるとも思ったか？」

直後、ジャージ姿の男たちが晴彦たち三人に塩を掛ける。

三人、涙目で激しくくしゃみをする。

黒服の男A 「崇高なる背徳精霊」

黒服の男B 「優渥ならざる凌辱天狗様」

高城 「万歳」

村人全員 「万歳」

高城が晴彦に目を向ける。

高城 「ガキの方は初めましてか。ようこそ辱辱村へ」

晴彦、涙目で男たちに奇異の視線を向けつつも、高城に食って掛かる。

晴彦 「いきなり何すんだよ」

高城が苛立たし気に反応。

高城 「あ？」

晴彦、僅かに尻込み。

高城 「このガキ、何て口のきき方だ。まさか俺が誰か分かってねえのか？」

高城、露骨に威圧する目つき。

晴彦、訝し気に、

晴彦 「誰だよ？」

高城、一步前に出て胸を張る。

高城 「俺だよ」

晴彦 「だから誰だよ」

高城 「（早口かつ大声で）うるせえ喋んな自殺しろ」

高城、晴彦を殴り飛ばす。地面に倒れる晴彦。

晴彦、頬を押しさえて忌々し気に高城を睨み上げる。

高城 「何でもかんでも大人に訊いてねえでちつとは自分で考えろ、糞ハゲが」

高城、茂と梨華を睨む。

高城 「てめえらも、一体どういう教育してんだ？ 鬼糞は自分のガキも碌に調教できねえのか？」

晴彦 「鬼糞？」

晴彦、困惑の顔。

茂と梨華、同時にひれ伏す。

梨華 「申し訳ありません、村長」

晴彦 「え、村長？」

晴彦、驚愕の顔。

高城、気を良くしたように豪笑。

高城 「てめえら二人の身柄は今夜の鬼糞祭りまでこっちで預かる。このガキは……そうだな」

高城、少し考えてから陰湿に微笑む。

高城 「どうせもうすぐ墮人になる身だ。実地研修ってことで、支給予定の学校にぶち込んでおくかな」

黒服の男たちが両側から晴彦を押しさえる。

晴彦 「は、放せ。何する気だ」

バンが停めてある方に引きずられていく晴彦。

高城 「ガキつてのは案外鬱憤ため込んでるからな。結構ハードな現場だと思っぜ？」

バンの後部に押し込まれる晴彦。

茂と梨華が申し訳なきように晴彦を見ている。

梨華 「ごめんね、晴彦」

晴彦 「え」

バンの後部ドアが閉められ、発車する。

高城 「せいぜい今日からは、もっと申し訳なきように生きるんだな（下品な馬鹿笑い）」

4. 分校・教室（昼）

生徒数二十人ほどの教室。生徒たちはゲームをしたり、いかに寝っ転がっていたり、大声をあげていたり物を投げたりと、学級崩壊の様子。

綾部隆（35）、教壇の上にて、苛立たし気な様子で、四つん這いで俯いた淀川文夏（15）に座っている。淀川の身体は震えており、荒い息をしている。制服はポロポロ。手の指の幾つかには包帯が巻かれている。

首には「墮人」と彫られた首輪をはめられている。その顔は泣きはらしている。

晴彦、茫然とした様子で後ろの方に突っ立っている。
綾部 「何が実地研修だ。鬼糞祭りでの鬼祓いの儀が済んでいないのなら、コイツは穢れの温床じゃないか。まったく迂闊に殴れもしない。村長ほどの法力があれば別なんだろうが……」

綾部、淀川に苛立たし気になりに座り直す。呻き声を上げて体勢を崩す淀川。

綾部、舌打ち。

綾部 「この椅子最近ガタつくな、もう寿命かな？ また燃やしちまうか？」

綾部、踵で淀川の腹を蹴る。

淀川、えづき、咳き込みながらどうにか体勢を整える。

その際スカートの裾から僅かに火傷の痕が見える。

淀川 「ごめんなさい、ごめんなさい」

綾部 「椅子は喋んねーだろ」

綾部、淀川の頭を叩く。

晴彦、手を挙げ、堪えかねたように口を開く。

晴彦 「あの……先生」

教室中の視線が晴彦に向く。

綾部、唾然とした表情。

晴彦、気まずそうに手を下ろす。

晴彦 「俺の席は？」

綾部、びっくりした表情。

綾部 「あるわけねーじゃん」

晴彦もびっくりした表情になる。

それに対して綾部もまたさらにびっくりしたというようにわざとらしくのけぞった仕草。淀川が呻く。

綾部 「てかこの状況で開口一番それとか、お前だいぶズレてんな」

綾部、少し考えて、

綾部 「ひよっとしてこイカレてんのか？」

自分の股間を指さす。

晴彦 「……は？」

綾部 「違うか？ じゃあ、ここか？」

綾部、虚空を指さす。

晴彦 「どこですか？」

綾部 「違うか？ じゃあ、ここか？」

綾部、左乳首を指さす。

晴彦、沈黙。

綾部 「それともここか？」

綾部、鼻を指さす。

晴彦 「先生……面白くないですよ」

綾部、唾然とした表情。

直後に見る見る怒気に染まる。

綾部 「じゃあどこがイカれてたらそんなに馬鹿になるんだよ答えろ糞泥人形がよ！」

綾部、言いながら淀川の腹を踵で三度蹴る。

淀川がえずいて何度も咳き込む。

晴彦 「普通に頭とかじゃないんですか」

綾部 「自分で言ってるんじゃないよ」

綾部、左胸の前で手でハート型を作る。

綾部 「てめえらに自傷なんて許されねえんだよ。他人から傷つけられて苦しむのが弱者の義務だろうが苦しんで死ぬ」

綾部、ウインクして、ハート型を前後に何度か動かす。

晴彦 「なんか台詞と動作対応してないな」

綾部 「うるっせえ、文句ばっか言ってるんじゃないやねえ、てめーはコオロギか」

晴彦、眉を顰めて、

晴彦 「コオロギってそんな比喻に抜擢されるほど文句言いがちなんですか？」

綾部 「黙れ揚げ足を取るな、死ぬ」

綾部、大げさな身振りで投げキスをする。

綾部 「うわ汚ね」

綾部 「俺はこう見えて人一倍繊細で傷つきやすいんだよ。もっと配慮しろ尊重しろ敬愛しろ嫌なら自殺しろ。てか俺より幸せな奴は自殺しろ。俺より一粒でも多く幸せを噛み締めてる奴は全員自殺しろ」

綾部、淀川の上で泣きながら駄々をこね始める。拳が淀川の背を打ち、足が腹を打つ。淀川は苦し気に呻き、咳き込む。

晴彦 「それより幸せの数え方の単位って『粒』で合ってるんですか？」

綾部 「だから黙れつつって……いや『幸せの数え方』って表現素敵だなお前詩人か？」

晴彦 「『墮人』って言われましたけど」

綾部、泣きながら何かを噛み締めるように何度も頷

く。

綾部 「詩人と見せかけて……深えなあ……」

晴彦 「浅いだろ」

直後、チャイムが鳴る。

綾部、瞬時に泣き止み、落ち着く。

綾部 「詩人風の墮人と駄弁ってたら終わっちゃったよ授業」

綾部、淀川の手を思いきり踏んで立ち上がる。淀川が悲鳴を上げる。

日直の生徒「起立」

生徒たちが立つ。

日直の生徒「条理解脱」

綾部・全生徒たち「条理解脱」

日直の生徒「我らが背徳精霊凌辱天狗様から幸せの波動を受け取る波動浴の時間です。それでは皆さん、気持ちを落ち着けて……ばんぎーい」

生徒たち全員と綾部が目を瞑り、万歳しながらジャンプする。

直後、皆一斉に着地。ドスンと鈍い音。

日直の生徒「反転連鎖の万華鏡。カラスが壱羽、あぶれて死んだ。膿も血反吐も七十五日。雨は排泄夜更けは臨終。死んだ朝日に照らされて、悪意の凱旋憎悪が喘ぐ。悪夢を

揺蕩う冒読者、血潮に溺れる貌亡き孤児^{みなしご}。墮ちる太陽狂

う月。罨られ犯されその傷で哭け。鬼さんこちら幽世^{かくりよ}へ。

郷に入りては皆殺し。後ろの正面お前の腸^{はらわた}」

綾部・全生徒たち「背徳ー、しあわせー、ばんぎーい」

晴彦はドン引きしている。

淀川は教壇にうずくまり、爪が割れて出血した指をおさえて泣いている。

綾部と全生徒たちは目を閉じてしばらく黙祷をしている。

続く